

『古今和歌集』における「離別」と「羈旅」の部立の成立について

A Study On The Establishment Process of *Ribetsu* and *Kiryō* in *Kokin Wakashū*

劉 菁菁

Liu Jingjing

摘要

This paper is a study of the compilation criteria of Volume 8, *Ribetsu*, and Volume 9, *Kiryō*, of the *Kokin Wakashū*. First, it examines the process of how the term *Kiryō* was adopted from a *Daishi* in *Manyōshū* into a heading of a category in *Kokin Wakashū*. Subsequently, the works by *Otomo no Yakamochi* and similar waka poems are examined. In doing so, this paper discusses how the acceptance of *Senbetsu* in Chinese poetry had promoted the composition of more waka poems on *Senbetsu* by bureaucrats for one another. And simultaneously, how this also prompted the establishment of the category on *Ribetsu*. However, it also indicates how the holding of banquets in which poets would compose their work had weakened the sense of sorrow expressed in poems of separations. Furthermore, it considers the compilation method of *Kokin Wakashū*, which had classified the *Jyūgaka* and the waka poems of *Yuran* in its ninth volume, *Kiryōka*, and argues how this method had preserved the meaning of journey in the term *Kiryō* while

excluding the part that means *Ryōshū* (*melancholy felt during a journey*).

キーワード

羈旅 (*Kiryō*)、離別 (*Ribetsu*)、部立、編纂

はじめに

「羈旅」という語は漢籍において、「旅先に滞在する悲しい旅」を指す用例が多く、旅愁を持つ詩語である¹。中国の漢詩集では、「羈旅」は詩語として散見しているが、部立になっていない。一方、『万葉集』における「羈旅」という題詞は、歌群の名前として編纂者によって用いられている。殆どが「雑歌」に用いられているが、「挽歌」「相聞」においても見られる。巻七の挽歌に「羈旅作」(一四一七)一首が収録されている²のに対し、巻十二の「古今相聞往来歌類之下」では「羈旅発思五十三首」の歌群がある。従って、『万葉集』における「羈旅」は独立した部立になっておらず、「雑歌」「挽歌」「相聞」に所属する小分類である。題詞に「羈旅」とされた歌群は、各巻に散在しており、異なる編纂法のもとで成り立ったものである。例えば、巻三の「柿本人麻呂羈旅歌八首」と「高市黒人羈旅歌八首」は「歌人名プラス歌群の主題」という形であり、歌人によって歌を分類する方法が窺える。これに対して、巻七の「羈旅作歌九十首」は「芳野作」「山背作」「摂津作」と並び、詠み込まれる地名による分類法³が現れている。さらに、巻十二の「羈旅発思」と「悲別歌」は「旅立つ男の歌」と「残される女の歌」という基準⁴によって分類されたものであり、恋人と別れる歌が殆どである。従って、『万葉集』における「羈旅」の歌群には、統一的な編纂基準は成り立っていないといえる。しかし、『古今和歌集』になると、「相聞」「挽歌」「雑歌」の三大部

立がなくなり、「羈旅歌」は「恋歌」「哀傷歌」などの部と並ぶ独立した部になった。『古今和歌集』の「羈旅歌」は「恋」や「死」を詠む歌から分離された一方で、統一的な基準を持つ部立になった。また、巻第八「離別歌」が成立することによって、人と離別する歌と旅中の歌が分けられ、「離別歌」と「羈旅歌」の編纂基準がそれぞれに定着した。

本論文は、『万葉集』と『古今和歌集』における「羈旅」の意味合いと使用状況を考察し、「羈旅」が「雑歌」「挽歌」「相聞」に所属する小分類から独立した部立になる過程を探る。また、「餞別」「遊覧」などの漢詩集の部立の受容を考慮し、「離別」と「羈旅」の部立の成立について論じる。

一、「恋」と「死」から分離された「旅」

『万葉集』において、題詞に「羈旅」とされた歌群及び歌は以下である⁵⁾。

- 卷三 柿本人麻呂羈旅歌八首
- 卷三 高市黒人羈旅歌八首
- 卷三 羈旅歌一首并短歌
- 卷七 羈旅作九十首
- 卷七 羈旅歌一首
- 卷十二 羈旅発思五十首
- 卷十七 大伴旅人倭従の悲傷羈旅歌群

これらの歌群は各巻に散在しており、統一的な編纂基準のもとで成り立ったものではない。しかし、いずれも「旅」と関わっていることが共通点である。「旅」及び「旅歌」の発生について、伊藤博氏は「本郷」と「異郷」の概念を出し、「本郷」と「異郷」とのあいだにひろがる距離の断絶に対する切実な願いは、古代における旅の歌々に一貫して流れる抒情の型をおのずからに導いた⁶⁾

と述べている⁶⁾。従って、「旅」が発生する条件としては、人々が日常生活を営む「本郷」から、空間的に離れる必要があると思われる。また、「本郷」の土地から離れることに従って、日常生活に馴染んでいる人々からも離れていく。既に多くの先学が指摘したように、旅路安全を祈る古代信仰があるため、「旅」の歌には、家に残る人をもって詠む表現が多い⁷⁾。しかし、詠む対象が「妹」である場合は、「旅」という作歌背景が後景化し、歌の表現は相聞歌に近い。例えば、巻四の丹比真人笠麻呂の「下三筑紫国」時、作歌一首并短歌（五〇九、五一〇）は旅立つ内容の歌であっても、相聞の歌に分類されている。従って、「相聞」と「旅」の関係を検討するために、本論は「旅」の主題を以下の二つに分けることとする。

- A 日常的に生活している土地から離れること。
- B 日常的に馴染んでいる人と離れること。

Aは「旅」という作歌の前提が成立する主要な条件でもある。この「日常的に生活している土地」は「家」「大和島」「都」などの語に示されている。旅先の地名や景色を詠む表現は、「日常的に生活している土地」から離れて「異郷」に経験したこととして詠んでいると思われる⁸⁾。Bの「日常的に馴染んでいる人」は恋人、父母、同僚などがある。主に「人と別れる歌」と「旅中で家族を思う歌」の二種類に分けられる。「羈旅」の歌群はこの二つの主題を両方とも詠む例が多い。例えば、柿本人麻呂羈旅歌八首は、明石海峡を通過して西へ下る旅で詠まれた歌である。その中に、「淡路の野島の崎の浜風に 妹が結びし 紐吹き返す」（万葉三・二五一）の歌はAを前提としてBを詠んでいる。従って、この歌は相聞的な要素を持っていても、「旅」という作歌の前提は明らか

かである。また、高市黒人羈旅歌八首の「妹も我も 一つなれかも 三河なる二見の道ゆ 別れかねつる」(一本に云く、「三河の二見の道ゆ 別れなば 我が背も我も 一人かも行かむ」(万葉三・二七六)は妹と別れる歌であり、「三河なる二見の道」の地名を詠み込むことよって、「旅」という前提が確保される。

しかし、Bを主要として詠む場合は、「旅」という要素が後景化し、歌群の性格が相聞歌に偏ることになる。その例は卷十二の「羈旅発思」である。卷十二の「羈旅発思」に収録した五十三首の歌において、「妹」、「我妹子」、「妻」を詠む例が二十一首あるのに対し、「君」や「人」を詠む歌は五例である。その中には女性の歌と理解しても良い例もあるが、歌群の全体は先行研究が指摘したとおり、「旅立つ男の歌」であると考えられる。また、歌群の冒頭に置かれた柿本人麻呂集による四首の歌は、歌群の性格を端的に表している。

度会の 大川の辺の 若久木 我が久ならば 妹恋ひむかも
(三一二七)
我妹子を 夢に見え来と 大和道の 渡り瀬ごとに 手向そ我がする (三一二八)
桜花 咲きかも散ると 見るまでに 誰かもここに 見えて散り行く (三一二九)
豊国の 企救の浜松 ねもころに なにしか妹に 相言ひそめけむ (三一三〇)

右の四首、柿本朝臣人麻呂が歌集に出でたり。

冒頭部に置かれたこの四首のうち、地名を読み込んだ歌が三首ある。その中で、「度会の大川」(三一二七)と「豊国の企救」(三一三〇)という二つの地名は序詞の構成部分である。実際に行っ

た地名というより、寧ろ相聞歌の技法として用いられていると思われる。従って、この四首の性格としては、旅歌ではなく、相聞歌に偏っている。この点について、神野志隆光氏はこの四首と巻七「羈旅作」に収録された人麻呂集略体歌を併せて考察し、「旅の歴史的現実に対応して、略体歌の段階で、相聞の歌の中にもちえたものとしてこれを捉えることが必要である。」と述べており、人麻呂集略体歌における旅歌と相聞歌の関係性を指摘した¹⁾。また、冒頭の四首だけではなく、「羈旅発思」歌群の全体的な性格について、梶裕史氏は「羈旅発思」の題の眼目が「発思」の二字にあるとした上で、「集められた歌の性格を考慮して、編者は、単に「羈旅歌」と題する場合は異なる分類意識を標榜している。」と述べている¹⁾。さらに、平舘英子氏は「羈旅作」が囑目の実景を描写し、望郷へと心情の展開を見せていたのに対し、「羈旅発思」の景は修辞として心情表現の背後にある。」と指摘した²⁾。従って、「羈旅発思」の歌は地名を読み込んでいるが、Bの「日常的に馴染んでいる人と離れること」が中心であるため、「旅」の要素が後景化した。そのため、「羈旅発思」は「雑歌」ではなく、「相聞」に分類されたと考えられる。

卷十二の「羈旅発思」と「悲別歌」は、万葉の編纂者が形として「羈旅」と「離別」を分けようとしたことを示している。「羈旅発思」と「悲別歌」の設置については、伊藤博氏は「この羈旅の部は、発想(羈旅発思・悲別歌)と形態(問答歌)に分かれているのだが、その発想の部分は、考えてみれば悲別歌・羈旅発思の逆の順序になるのがどう見ても自然である。」と指摘しており、人麻呂歌集歌の悲別歌の欠如と人麻呂歌の「古」としての權威を示すために、編纂者が「羈旅発思」を「悲別歌」の前に置いたと主張している³⁾。「悲別歌・羈旅発思」の順番が自然である理由は、恐らく人と離別してから旅に立つという時間軸で考えているから

であろう。また、「悲別歌」が「羈旅発思」の前に置くことは、卷十五遣新羅使人歌群の配列、及び『古今和歌集』の卷第八「離別歌」と卷第九「羈旅歌」の設置と一致しているからである。しかし、「羈旅発思」と「悲別歌」の背後にある分類法は、古今集「離別歌」と「羈旅歌」とは完全に異なっている。古今集の時間軸によって「離別」から「羈旅」の順で配列したことに対し、「羈旅発思」と「悲別歌」は詠み手で歌を分類する方法によって成り立った歌群である。従って、「羈旅発思」と「悲別歌」を相聞の歌群だと考えると、男性が先に歌を送る形に即して、男の歌群が前に配列されたのなら、この順序も頷ける。

「羈旅発思」の歌は「旅」と関わっている一方で、相聞的な要素を持っている。このような歌は、「相聞」に分類した歌だけにおいて存在しているのではなく、雑歌に分類された「羈旅」の歌群においても存在している。

(イ) 妹があたり 今そ我が行く 目のみだに 我に見えこそ

言問はずとも (万葉七・一二二一)

(ロ) あしひきの 山行き暮らし 宿借らば 妹立ち待ちて

宿貸さむかも (万葉七・一二四二)

(イ)と(ロ)は卷七「羈旅作歌九十首」に収録されているものである。(イ)の「妹があたり 今そ我が行く」の類似表現として、人麻呂の石見相聞歌の反歌の一首「青駒が 足掻きを速み 雲居にそ 妹があたりを 過ぎて来にける」に云ふ、「あたりは 隠り来にける」(万葉二・一三六)が挙げられる。一三六は妹と離れてでかける際(往路)の歌であるのに対し、(イ)は妹との再会(復路)を詠む歌である。(ロ)の「宿借る」の表現について、卷二相聞歌の石川女郎が大伴田主に贈る歌「みやびをと 我は聞

けるを やど貸さず 我を帰せり おそのみやびを」(一二六)が挙げられる。歌の左注¹⁴によると、「やど貸さず」は二人が共寝しないことを指している。従って、(ロ)の歌には「妹と共寝する」という意味が含まれる。(イ)と(ロ)はいずれも相聞歌と共通する表現を用い、旅人が復路の途中で妹と再会する期待を詠むものである。しかし、旅先の地名などのA「日常的に生活している土地から離れる」ことを示す表現が欠如しているため、この二首の歌は相聞歌に近い。このように、(一) B「日常的に馴染んでいる人」だけを詠む歌は、「旅」という作歌の背景が後景化する。また、詠む対象が「妹」である場合には、歌が相聞歌に転じる。このような歌は、相聞に分類された歌だけではなく、雑歌に属する「羈旅」の歌群においても見られる。(二)万葉集において、題詞に「羈旅」とされた歌は、AとBを同時に詠む、Aだけを詠む、Bだけを詠むという三つの種類に分けられる。

しかし、古今集になると、Aだけを詠む歌は「羈旅歌」になり、AとBを同時に詠む歌は「離別歌」になり、Bだけを詠む歌は「離別歌」と「羈旅歌」の範疇の外にされた。例として、「離別歌」の冒頭の二首を挙げる。

題しらず

在原行平朝臣

立ちわかれ いなばの山の 峯におふる 松としきかば 今か
へり来む (古今八・三六五)

よみ人しらず
すがる鳴く 秋の萩原 朝たちて 旅行く人を いつとか待た
む (古今八・三六六)

題詞に贈答歌とは記されていないが、配列によって贈答の歌と

見なすことができる¹⁵⁾。冒頭の歌として、「別れ」と「かへり来む」(三六五)、「旅行く」と「待ちたむ」(三六六)が詠まれている。旅行く人と残される人の贈答になっており、Bの主題を明確に表している。また、「いなばの山の」と「旅行く人を」の表現がAという「旅」の前提を明らかにしている。さらに、この二首が冒頭部に置かれたということが、「旅立つ男の歌」と「残される女の歌」の形が「離別歌」の典型であると示しているだろう。しかし、詠み手で歌を分類する『万葉集』の「羈旅発思」と「悲別歌」の基準とは異なり、両首とも旅立つ前の段階として、「離別歌」に分類されている。

また、『万葉集』においてBを詠む歌の対象は殆ど「妹」であるのに対して、『古今和歌集』のBを詠む歌は同僚、友を対象としたものが多い。そのことよって、「旅」と「恋」が区別されることになった。なお、題詞と左注によって男女の離別歌だと判断できるものが三首ある¹⁶⁾。さらに、恋歌の巻においても、旅のために恋人との別れを詠む歌が二首ある。「離別歌」と「恋歌」の基準を探るために、「恋歌」に収録された「旅」と関わる二首と比較してみよう。

(ハ)

題しらず

よみ人しらず

唐衣 たつ日はきかじ 朝露の おきてしゆけば 消ぬべきも
のを (古今八・三七五)

この歌は、ある人官を賜はりて、新しき妻につきて、年経て住みける人を捨てて、ただ、「明日なむ立つ」とばかり言へりける時に、ともかうもいはでよみてつかはしける

(ニ)

常陸へまかりける時に、藤原公利によみてつかはしける
あさなけに 見べき君とし 頼まねば 思ひ立ちぬる 草枕な
り (古今八・三七六) 寵

(ホ)

紀のむねさだが東へまかりける時に、人の家にやどりて、
あかつき出で立つとて、まかり申しければ、女のみみてい
だせりける

よみ人知らず

えぞ知らぬ 今心見よ いのちあらば 我やわするる 人やと
はぬと (古今八・三七七)

(ヘ)

中納言源昇の朝臣の近江介に侍りける時、よみてやれりけ
る

相坂の ゆふつけ鳥に あらばこそ 君が往き来を なくなく 閉院
も見ぬ (古今十四・七四〇)

(ト)

仲平の朝臣あひしりて侍りけるを、離れ方になりければ、
父が大和守に侍りけるもとへまかるとて、よみてつかはし
ける

伊勢

三輪の山 いか待ち見む 年ふとも たづぬる人も あらじ
と思へば (古今十五・七八〇)

(ハ)と(ト)はそれぞれ巻第十四「恋歌四」と巻第十五「恋歌五」に収録されたものである。また、(ハ)(ホ)と(ヘ)は男性の旅を見送る女性の歌であるのに対し、(ニ)と(ト)は女性が旅立つ歌である。(ハ)は女性が男性に送る離別歌であると同時に、左注が記した事情があるため、男性に捨てられた女性の歌としても見られる。この一首は旅による二人の関係の破綻を表している。また、(ホ)は「えぞ知らぬ」と「いのちあらば」の表現があり、離別することによって二人の関係が絶望の境地に達することを表している。(ハ)と(ホ)に対し、(ヘ)の「君が往き来を」はまだ日常感が残されている。さらに、(ニ)は「思ひたちぬ」のなかに常陸の地名を詠み込んでおり、また旅という主題を明確に表す「草枕」も用いている。これに対し、(ト)は「わがいはは 三輪の山もと こひしくは とぶらひ来ませ 杉立てる門」(九八二)を下敷きとして詠まれたもの¹⁷であり、旅による恋の諦めを詠むのではなく、男性が通うようにと誘う意味も読み取れる。従って、古今集の「離別歌」は、日常的な男女の別れの歌を扱わず、Aの「日常的に生活している土地から離れること」を詠む表現、つまり旅によって別れるということ为前提として重んじていることが分かる。また、「羈旅歌」に収録された歌も、「恋」と関わるものが見られる。その例としては在原業平の東下りの二首(古今九・四一〇と四一一)がある。業平の二首は「なれにしつま」と都にいる「わが思ふ人」を詠んでいるが、「はるばるきぬる旅」や「都鳥」などの表現によってA「日常的に生活している土地から離れる」ことを明らかに示している。また、詞書から見ると、これは集団の前に「旅の心」(四一〇の詞書)について詠んだ歌だと分かる。このように、古今集のAを重んじる選歌基準によって、「羈旅歌」における「恋」の要素が極めて希薄になったといえる。

さらに、『万葉集』の挽歌に分類されている羈旅作は一首のみあ

るが、「旅」と「死」の関係が緊密であるといえる¹⁸。例えば、柿本人麻呂の「石中死人歌」(巻二・二二〇～二二二)、田辺福麻呂の「見死人歌」(巻九・一八〇〇)などの歌は挽歌に分類されているが、「旅」という作歌の背景がある。古今集の「羈旅歌」においても、「死」と関わる歌が一首見られる。

題しらず

よみ人しらず

北へ行く 雁ぞ鳴くなる つれてこし かずはたらでぞ 帰る
べらなる(古今九・四一二)

この歌は、ある人、男女もろともに人の国へまかりけり。男まかりいたりて、すなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に、帰る雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ。

この歌は旅中で見た雁に託し、仲間を失った悲しみを詠んでいる。歌の内容から見ると、旅中で見たものを詠んだ歌であるが、左注に作歌背景を記しているため、「復路の作」「旅中の作」「亡くなった人を悼むこと」であったことが分かる。また、巻十六「哀傷歌」にも「旅」と関わる一首ある。

甲斐国にあひしりて侍りける人とぶらはむとてまかりけるを、みち中にてにはかに病をして、いまいとなりにつれば、よみて「京にもてまかりて母に見せよ」といひて、人につけ侍りける歌

在原しげはる

かりそめの ゆきかひ路とぞ 思ひこし 今は限りの 門出なりけり(古今十六・八六二)

詞書に「みち中」と記されているため、旅中の歌だと判断できる。しかし、旅中の景物に託さず、正叙心緒の歌である。この歌では、「今は限りの 門出なりける」と自らの命の終わりを詠んでいる。この一首は旅中の歌にも関わらず、「哀傷歌」に分類されている。題詞が記した作歌の背景を一旦に置いて、この二首の内容の区別を言うと、八六二は自らの命の終焉を悲しむ歌であるのに対し、四一二は旅中で鳴く雁を見たきっかけで、亡くなった人を悼む歌である。従って、四一二は「死」と関わっているが、歌の内容は旅中の景物と心情を詠むことである。

以上により、(一)『古今和歌集』の「離別歌」は旅によって人と別れる歌の巻である。B「日常的に馴染んでいる人と離れること」だけを詠む歌が「離別」の範囲に含まれない。『古今和歌集』の「離別歌」は「旅」という作歌の前提を重んじており、A「日常的に生活している土地から離れること」とB「日常的に馴染んでいる人と離れること」を両方とも詠む歌を収録している。(二)『万葉集』において、「羈旅」は「相聞」「挽歌」「雑歌」の小分類として用いられている。『古今和歌集』になると、歌の内容或は題詞の記述によって、「旅」の歌は「恋」や「死」と区別され、「恋歌」「哀傷歌」とは別々の巻になった。また、「旅」の歌が人と離別する歌と旅中の歌に細分化しており、「離別」と「羈旅」は形式として、独立した歌のジャンルになったといえる。

二、「餞別」という主題の受容

『万葉集』において、Bの「日常的に馴染んでいる人と離れる」ことを詠む歌は、恋人との離れを詠む例が大部分を占めている。しかし、『古今和歌集』になると、友人や同僚との離れを詠む歌が『万葉集』より多く収録されている。これは漢詩集の影響だと考えられる。中国の詩集の『文選』には、「祖餞」の部が見られ、収

録されたのは全て男が友人を送別する作品である。それに対し、日本の漢詩集では、『文華秀麗集』において、「餞別」の部が成立しており、官僚の送別宴で詠まれた詩が殆どである。しかし、「餞別」という語は、中国の漢詩集において部立名としてなっていない。なお、『旧唐書』では、「以詩餞別」や「賦詩餞別」の内容があり、官僚達が別れる際に互いに餞別詩を詠むことは記されている¹⁾。それが『文華秀麗集』の撰者が漢語の「餞別」を部立の名として用いている理由だと思われる。また、「旅」と関わる部について、『文選』では「遊覧」「祖餞」「行旅上」「行旅下」の部が見られる。人を送別する作と旅中の体験を詠む作を分けている一方、旅の目的によって「遊覧」と「行旅」にも分けている。なお、『文華秀麗集』では「遊覧」「餞別」が設けられているが、旅の目的によって「遊覧」と区別する「行旅」の部がないことが異なる。

餞別詩は日本の伝統的な離別歌が相聞の要素を持つのは異なり、主に男同士、官僚同士が別れる際に詠まれたものである。また、『文選』の「祖餞」に収録された作品を見ると、潘安仁の「金谷の集まりにて作れる詩」や謝宣遠の「王撫軍、庚西陽との集ひにて別る。時に豫章太守と為る、庚は徴されて東に帰る」があるように、餞別詩は集団で詠まれることが多く、送別宴の場面と関わっている。

『万葉集』における「餞別」という語について、松田聡氏の指摘²⁾によれば、大伴旅人の太宰府の歌、及び家持の周辺の歌との関連性が緊密であることが分かる。古今集の「離別歌」では、官僚の送別宴で詠まれた歌と明記しているのは五首あり、友を送別すると記しているのは二首ある。従って、古今集の「離別歌」の巻は、「餞別」という漢詩の主題を受容しているといえる。なお、「餞別」が多く詠まれたのが万葉集の巻十七以降の四巻においてであり、家持の周辺の歌である。和歌における「餞別」の受容は、

官僚の送別宴と緊密に関わっているといえる。

四月二十六日、掾大伴宿禰池主が館にして、税帳使の守大伴宿禰家持に餞する宴の歌并せて古歌四首

玉梓の 道に出で立ち 別れなば 見ぬ日さまねみ 恋しけむ
かも（一に云ふ、「見ぬ日久し恋しけむかも」）（十七・三九九五）

右の一首、大伴宿禰家持が作。

我が背子が 国へましなば ほととぎす 鳴かむ五月は さぶ
しけむかも（十七・三九九六）

右の一首、介内藏忌寸繩麻呂が作。

我なしと なわび我が背子 ほととぎす 鳴かむ五月は 玉を
貫かさね（十七・三九九七）

右の一首、守大伴宿禰家持が和へなり。

石川朝臣水通が橋の歌一首

我がやどの 花橋を 花ごめに 玉にそ我が貫く 待たば苦し
み（十七・三九九八）

右の一首、伝誦するは、主人大伴宿禰池主なりと云爾。

この四首は税帳史として帰京する家持の送別宴で詠まれた三首と池主の伝誦歌一首である。送別宴で詠まれた三首を見ると、「我が背子」という相聞的な表現が見られる以外、家持がいなくなつたあとの五月と五月の景物としての「ほととぎす」が詠み込まれている。「ほととぎす」が夏の代表的な景物として定着したのは、

家持が詠み始めてからであるといえる²¹。このように、送別宴が行われる季節の景物を読み込む例は、家持周辺の歌においては例外的なものではない²²。例えば、卷十九の「二月二日に、守の館に会集して宴して作る歌一首」（四二三八）では、「梅柳 誰と共にか 我がかづらかむ」と詠まれ、左注では「越中の風土に、梅花柳絮三月にして初めて咲くのみ。」と記しており、送別宴と「梅柳」の関係を示している。

松田氏は『文選』の「祖餞」と『芸文類聚』の「別」に収録された漢詩を取り上げ、「美景を詠み込むこと」と「離別後に美景を共にできなくなるという発想」は漢籍の影響だと主張している。前に挙げた三九九六と三九九七の歌は、友人がいなかったため、「ほととぎす」を一緒に楽しめないことを詠んでおり、「離別後に美景を共にできなくなるという発想」が窺える。しかし、漢詩と和歌の題材、詠み方の相違によって、その影響は発想の面に留まっているといえる。ここで、松田氏が取り上げた原典を検討しよう。

① 春榮誰不慕、歳寒良独希。投分寄石友、白首同所帰。
〔『文選』祖餞 潘安仁「金谷集作詩」〕

② 花樹雜為錦、月池皎如練。如何当此時、別離言与宴。
〔『芸文類聚』別上 斉・謝眺「別王僧孺詩」〕

③ 籜解篁開節、花閨鳥迷枝。窗陰随影度、水色帯風移。
徒命銜杯酒、終成憫別離。（『芸文類聚』別上 梁・簡文帝「餞別詩」）

①の潘岳の詩は、金谷というところで行われた石崇の送別宴での作である。前半では松田氏が指摘したとおり、宴が開催される

環境、季節の景物などを描く内容が多い。しかし、挙げた後半の部分を見ると、「春榮」と「歳寒」の対句は「春」から「冬」、「青春」から「老年」という友と別れた後の季節の移り変わり、及び時間の推移を暗示し、下句の「白首」が再会するまで過ごす時間の長さを強調している。また、②の詩において、花、樹、月と池を美しい景物として描きながら、下二句は「なぜその美しい景色を楽しむべき時に、私たちが離別することになるのか。」という意味となる。景物の繁榮と人間の悲傷という対比を表し、その対比によって友と別れる情が一段と悲しく表れているのである。③において、②の技法とは異なり、人の離別による悲しい心情によって、美しい景物が悲しく見えるようになっていく。最後の「終成憫レ別離」は直接に離別の悲傷を語っている。以上により、中国漢詩の「餞別」における景物の描写は、「離別後に美景を共にできなくなる」ということを表すだけではない。惜しむ心情より、友と離別した後の季節の移り変わりを暗示し再会するまでの時間の長さを嘆くことを示す意味がある。①②③は異なった技法を用いて景物を捉えているが、詩の最後に友と離別する悲しみを語るころは一致している。

一方、送別宴で詠まれた和歌は、離別してからの時間の推移を詠む表現はあるが、季節の移り変わりの表現が少なく、送別宴を行う時期に沿って景物を詠むものが多い。また、季節と関わる景物（及びその季節と関連する発想）は、送別の主旨を表していると共に、宴会を楽しませる役割も果たしている。例えば、前に挙げた三九九七と三九九八で用いている「玉を貫く」（「菓玉を作つて遊ぶ」²³）という表現がそうである。従って、送別の際に景物を積極的に詠み込むこと、及び「離別後に美景を共にできなくなる」という発想は中国の漢詩から受容したが、宴会という場面によって、離別の悲しみが希薄になったといえる。

藤原後陰がからものつかひに、長月のつごもりがたにまかりけるに、うへのをのこども酒たうびけるついでによめる

ふちはらのかねもち

もろともに 鳴きてとどめよ きりぎりす 秋の別れは

惜しくやはあらぬ（古今八・三八五）

平ものり

秋霧の ともに立ちいでて 別れなば はれぬおもひに 恋ひやわたらむ（古今八・三八六）

この二首は古今集の「離別歌」に収録された送別宴の歌である。

藤原後陰の送別宴が長月に行われたため、歌では「きりぎりす」「秋の別れ」と「秋霧」を詠み込んでいる。この二首の歌に対して、松田武夫氏は「役目が終われば再び帰京することを予想して詠んだので、深刻な悲哀感にあふれるものではない」と評している²⁴。宴会の場面と歌人が季節の景物に関心を寄せることに従って、離別の悲しみが希薄になっている。また、悲しみが希薄になったことは、宴会という場面の問題だけではなく、旅の形の変化とも関わっている。つまり、遣新羅使人のような長時間、及び一次的な旅から、任地と都の間を往復する旅への変化が、官僚同士の離別歌の詠み方に変化をもたらした。また、旅の目的が多様化することも、「離別」という主題を享受する方法の変化を促したと思われる。例えば、古今集の「離別歌」に収録された僧侶の歌（三九二―三九六）は、お寺に詣でた人との別れを詠む歌であり、山の景物を詠み、引き止めた気持を詠むので、ウィットにとんだ挨拶であって、別れの悲しみを詠んだ歌とはいえない。そのた

め、古今集の「離別歌」は男女離別の歌以外に、友人、同僚、一時的に会う人たちとの離別歌を収録しており、離別の悲しみを詠む「悲別」の歌は少なくなった。なお、「旅」の悲しみが希薄になったのは、「離別歌」だけではなく、「羈旅歌」も同じである。

三、失われた「旅愁」

先述したように、『文選』において、旅立つことを詠む作は旅の目的によって「遊覧」と「行旅」に分けられている。「羈旅」は「旅先に滞在する悲しい旅」を表す詩語として各巻に散見するが、部立ではない。

一方、『万葉集』における「羈旅」は題詞であり、殆ど下級官僚の歌や作者未詳の歌群の名前として用いられている。羈旅歌と行幸従駕の歌は同じく雑歌に属しているが、従駕の歌を「羈旅」に分類したことはない。従って、万葉集の編纂者は漢籍における「羈旅」の意味を知った上で、行幸従駕と羈旅歌を区別して用いている可能性がある。また、「羈旅」の歌群だけではなく、他の題詞でも、離別の悲しみと旅愁を表しているものが見られる。例えば、卷十五遣新羅使人の歌群には「別れを悲しびて贈答し、また海路に情を働まして思ひを陳べ」(三五七八～三七二二)と記しており、卷十七旅人の僊従の歌群には「ここに羈旅を悲傷し、各所心を陳べて」(三八九〇～三八九九)とある。卷十七の歌が家持と直接に関わっている以上、伊藤博氏は遣新羅使の歌群の冒頭と末尾に手を加えたのは整理者の家持であると主張している²⁵。つまり、離別の悲しみと旅愁を両歌群の基調にしたのは、家持であったと考えられる。しかし、これらの題詞が指す旅愁は、海路という旅方式と関わり、旅中の困難と危険に対する不安と理解される。この悲しみは、漢詩における「旅愁」(故郷以外のところをさすらう悲しみ)と意味上の違いがある。例えば、『懷風藻』の「旅愁」に

ついて語る詩作を挙げて見よう。

五言。奉西海節度使之作。

往歳東山役。今年西海行。行人一生裏。幾度倦レ辺兵。

これは『懷風藻』に収録された藤原宇合の詩であり、職の変動のため旅に出ることに対し、中国漢詩に近い倦怠の感情を表している。辺境に赴任したくない意味も読み取れる。辰巳正明氏は宇合を餞別する高橋虫麻呂の歌を取り上げ、歌と詩が表す感情の相違を指摘した²⁶。虫麻呂が詠んだ歌においては、朝廷から節度使として任命されたことを名譽としており、反歌の「千万の軍なりとも 言挙げせず 取りて来ぬべき 士とそ思ふ」(六・九七二)は特に任命される誇りを表している。辰巳氏の論によれば、この詩では、中国六朝詩人の立名への意識が背後にあり、宇合の「政治的拙折」を表すとしている²⁷。宇合が中国六朝詩人の思想をどのくらい受容したのかは別の問題として、和歌と漢詩の表現の相違は辰巳氏が指摘したとおりだと思われる。家から離れる旅はある種の漂泊と見なされ、さすらう生活を早く終えたいという「旅愁」は、『文選』においてよく見られる。家から離れる理由が故郷から離れた土地への赴任であっても、名譽なこととして詠まず、故郷から止むを得ず離れる一種の「旅愁」として見なされる。例えば、『文選』に収録された陸機の「羈宦」詩(雜擬下・雜体詩三十首)において、「遊子易ニ感愴、躑躅還自憐」の内容がある。これは陸機が平原内史に任命された後に書かれたもの²⁸であるが、故郷から離れる哀傷が溢れている。このように、仕途のため、現実の生活のため、精神的な自由が得られない、という感情を詠むのが中国詩の定番である。そのため、宇合の詩は『文選』における「旅愁」を受容した作品であると考えられる。しかし、『万葉

集』において、家持は「慟^レ情陳^レ思^レ（情を慟ましめて思ひを述べ）と「悲^ニ傷羈旅^一（羈旅を悲傷する）」の表現を用いて万葉の題詞を書いたが、文脈から見ると、漢詩の「旅愁」を指しているのではない。万葉の題詞が表している旅愁は、やはり和歌での離別の悲しみと旅路の安全に対する不安を指しているだろう。

なお、『古今和歌集』になると、「羈旅」という語の背後にある旅愁が、さらに失われたといえる。その理由は、「羈旅歌」の編纂基準の変化と関わっている。『古今和歌集』では、旅立つことを詠む歌は『文選』のように旅の目的によって「遊覧」と「行旅」に分けられておらず、全て「羈旅歌」の巻に収められている。そのように編纂する理由として、まず、旅立つことを詠む和歌の数が少ないからだと考えられる。古今集の「離別歌」の詞書を見ると、「越へまかりける人によみてつかはしける」(三七〇)、「東の方へまかりける人によみてつかはしける」(三七三)、「あふさかにて人を別れる時よめる」(三七四)などがあり、「離別」は「旅によつて人と別れる」意味であると理解される。従って、「離別歌」は送り手が必要であり、対詠の性格を持つ。これに対して、「羈旅歌」は「唐土にて月を見てよみける」(四〇六)、「東の方より京へまうでくとて、道にてよめる」(四一三)、「越の国へまかりける時、白山を見てよめる」(四一四)、「甲斐国へまかりける時、道にてよめる」(四一六)などの詞書が示しているように、旅中の歌である。従って、「離別」という題材が和歌の贈答の伝統に相応しいことが、歌の数が「羈旅歌」の倍を越えている理由であろう。これに対し、旅中の体験や心情を詠む「羈旅」は漢詩から受容した主題であるため、和歌の伝統から言うると、新しい題材であると考えられる。『後撰集』においては、この傾向が一段と顕著になる。『後撰集』において、「離別」と「羈旅」の主題は独立しておらず、同じく巻十九に分類されている。「離別」は四十六首の歌を収録して二十二

首が贈答の歌であるのに対し、「羈旅」は十八首であり、全て単独の歌である。「羈旅」の詞書では、「道中よりたよりの人につけてつかはしける」(後撰・一三五三)「遠き所より帰りまうで来ける、道に留まりて」(後撰・一三六五)のように道中で詠むという作歌背景を強調する記述が見られる。このように、旅中の見物などを詠む歌は独詠的な性格を持ったため、歌の数が少ない。そのため、『文選』のように旅の目的によって細分化することができない。従って、『古今和歌集』の「羈旅歌」は赴任の旅、遊覧の旅、従駕の旅などの様々な旅で詠んだ歌をまとめたと考えられる。

また、贈答歌とは異なり、旅中で歌を詠む場面は限られている。本論は『古今和歌集』の「羈旅歌」の題詞、左注或いは歌の内容によって、「羈旅」を詠む場面を次の四つに分けることとする。

- (1) 家族に届ける歌
- (2) 道中の留まり、旅中の宴
- (3) 遊覧先の歌
- (4) 従駕の歌

(1) は小野篁が隱岐国に流罪される時の歌(四〇七)が挙げられる。詞書に「舟にのりて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける」と記しており、旅中で詠んだ歌であることを示している。また、卷十八「雑歌下」にも小野篁の歌一首「思ひきやひなの別れに おとろへて 海人の縄たき いさりせむとは」(九六一)が収録され、詞書に「隱岐国に流され侍りける時によめる」と記されている。この二首は作歌背景がほぼ同じであるが、旅中の歌かどうかによって「羈旅」と「雑歌」に収録されたと思われる。(2) は在原業平の東下りの歌(四一〇、四一一)や詞書に「道にてよめる」を記した歌が挙げられる。例えば、「甲斐国へまかりける時、道にてよめる」と記した躬恒の歌(四一六)は、具体的にどの場面で詠まれたのかは不明であるが、ただ歌人の経歴から

赴任する途中の歌だと推測できる。(3)は藤原兼輔の但馬国の湯に行く途中の歌(四一七)、惟喬親王に従って狩に行く途中で詠まれた業平の歌(四一八)と紀有恒(四一九)の歌が挙げられる。(4)には宇多天皇の宮滝行幸の時に詠まれた菅原道真の歌(四二〇)と素性法師の歌(四二二)がある。(3)と(4)を見ると、旅の目的を記して、天皇の歌と官僚の歌によって分類する万葉集の編纂方法²⁾とは異なり、古今集の撰者は旅中の作という条件を満たした遊覧と従駕の歌も「羈旅歌」に分類した。

また、(1)の場合は、道中で個人的に歌を詠むことが思われるが、(2)(3)(4)の場合は集団の中で歌を詠む可能性が高い。特に(3)と(4)は『万葉集』において、殆ど雑歌に属しているが、「羈旅」に分類されたのは古今集からのことである。集団で歌を詠むことによって、詠みが技巧的になり、離別の悲しみと旅愁が単なる歌の題になり、次第に概念になっていく。例えば、「かきつばた」を句の頭にした業平の歌(四一〇)の詞書に「旅の心をよまむとてよめる」と書いてあり、「旅」という題詠の形成が窺える。さらに、遊覧歌と従駕歌のような旅を楽しむ歌を「羈旅」に分類した結果、旅愁がより一層希薄になっている。これは古今集の撰者が旅歌の編纂方法を変え、「羈旅」という語を再定義したといえる。古今集の撰者が用いた方法は、元々「羈旅」の「羈」が持つ旅愁の情を単に「留まる」という意味に再解釈し、羈旅歌を「旅中の歌」にした。

おわりに

本論文では、漢語が古代日本の韻文学の『万葉集』や『古今和歌集』における使用法から、『古今和歌集』の撰者の分類法を考察した。結論としては以下のものである。

(一)「羈旅」は中国漢詩集において、旅先に「滞在する旅」を

表す一つの詩語であるが、一つの部立としてなっていない。『万葉集』においても、「羈旅」は独立した部ではなく、羈旅歌群では、相聞的、挽歌的な諸要素が混在している。巻十二の「羈旅発思」と「悲別歌」を設けた編纂者は、詠み手によって「離別」と「羈旅」を分ける方法を試みた。『古今和歌集』になると、「離別歌」「羈旅歌」「恋歌」「哀傷歌」の部が成立し、「離別」と「羈旅」は形式として独立した部になり、編纂基準がそれぞれ定着した。『古今和歌集』の「離別歌」と「羈旅歌」は「恋」や「死」を詠む歌から分離し、「旅」という主題が明確になった。

「羈旅」という分類の編纂基準について、『万葉集』巻三の「柿本人麻呂羈旅歌八首」や「高市黑人羈旅歌八首」を見ると、万葉初期に「羈旅」は天皇の従駕の旅と区別するため、「官僚の旅」として、編纂者によって用いられた可能性がある。つまり、最初の「羈旅」の歌群は、歌人の身分によって歌を分類する方法のもとで、成り立ったものだと考えられる。巻三以外に、巻七羈旅作の歌に詠みこまれる地名による分類法や、巻十二「羈旅発思」の詠み手による分類法などが存在しているが、『古今和歌集』のように旅の時間軸によって「人と別れる歌(離別歌)」と「旅中の歌(羈旅歌)」の分類方法はまだ確立していない。但し、巻十五の「旅」と関わる「遣新羅使人」の歌群では、人と別れる「贈答歌十一首」が冒頭部に置かれ、歌を旅の時間軸によって配列していることが見られる。従って、旅の時間軸によって歌を配列する方法は、万葉後期には既に存在していた。『古今和歌集』はその編纂方法を継承し、「離別歌」と「羈旅歌」を設けたと考えられる。それだけではなく、『古今和歌集』の「羈旅歌」は殆ど官僚の歌を収録しているため、「羈旅」が「官僚の旅」を指すという万葉初期の編纂方法も継承したと思われる。

(二)「餞別」という漢詩からの主題の受容によって、官僚同士

の離別歌が多く詠まれるようになった。万葉後期では、官僚同士の送別宴で詠まれた歌が多く収録されており、特に家持周辺の歌が顕著である。そのことは、『古今和歌集』の「離別」の部立の成立を促した。また、公的な場面で、集団で詠まれる「別れ」が古今集の従駕歌を羈旅の部にいられる一要因になった。しかし、宴会という作歌場面があることで、歌が詠まれる離別の悲しみが希薄になっている。

(三) 旅中の体験を詠む歌の数が比較的に少ないため、『古今和歌集』の編纂者は、旅中で詠まれた歌を旅の目的を問わず、全て「羈旅歌」にまとめた。「羈旅歌」が少ない理由として、「羈旅」は漢詩から受容した題材であるからだと考えられる。中国漢詩における「羈旅」は、詩人の憂鬱や、孤独感などの内面的な心情を含め、独詠的な性格を持っている詩語である。一方、『万葉集』では「羈旅」という漢語を受容したが、「羈旅」に分類された歌は相聞や挽歌の表現を借りて詠まれているものが多い。「旅愁」を詠む歌があっても、家族を思う悲しみや、旅路に対する不安などを詠むものが殆どである。『古今和歌集』になると、「恋」と「死」の要素から分離することによって、「羈旅」という部立が確立されたが、歌の数が少なくなった。そのため、「羈旅歌」の一巻になるために、『古今和歌集』の撰者は遊覧の歌と従駕の歌を「羈旅歌」に分類した方法を取った。その分類によって、羈旅歌を「旅中の歌」という意味に変化し、漢語・漢詩の「羈旅」が持つ旅愁の陰影が希薄になった。

注

*本文が引用した『万葉集』の原文及び訓読は西本願寺本を底本とした『新編日本古典文学全集』（小学館）に拠った。『古今和歌集』の原文は藤原定家筆の伊達家旧蔵本を底本とした『全対訳 日

本古典新書』（片桐洋一訳・注、三省堂書店）に拠った。中国漢詩の原文は上海古籍出版社刊『文選』、中華書局刊『芸文類聚』に拠った。

- 1 安藤信広「羈旅する詩人たち―『万葉集』と六朝文学と」、『日本文学誌要』(24)、1981年2月)に詳しい。
- 2 『新編日本古典文学全集』(小学館)の頭注によると、一四一七番が挽歌に収録された理由は、増補の可能性がある。
- 3 最初に巻七「羈旅作」が五畿七道順で配列されていると示唆したのは村瀬憲夫氏「万葉集巻七雑歌部羈旅歌群の配列」、『国語と国文学』57(8)、1980年8月)においてである。
- 4 露木悟義「羈旅発思と悲別歌」、『万葉集を学ぶ 第六集』有斐閣、1978年)や辰巳正明「悲別の歌流れ 女たちの別れ歌」、『万葉集に会いたい』笠間書院、2001年)が挙げられる。
- 5 巻五に収録した吉田連宜から大伴旅人への書簡において、「羈旅邊城懐古舊而傷志」という内容がある。歌群の名前ではないため、ここでは取り上げていない。
- 6 『萬葉のいのち』(塙書房、1983年) 142頁
- 7 神野志隆光氏は「行路死人歌の周辺」、『柿本人麻呂研究』塙書房、1992年)において、旅人と「家」「妻」の間に呪術的な共感関係を持つことを主張している。また、伊藤博氏は「家」と「旅」、『萬葉のいのち』塙書房、1983年)において、旅歌における「家」と「旅」の構図を指摘した。
- 8 和歌における地名を詠む表現について、折口信夫「生命の道標」(『文学様式の発生』『折口信夫全集4』中央公論新社、1995年、136-146頁)、或は伊藤博の「羈旅信仰」(『近江荒都歌の文学史的意義』『万葉集の歌人と作品 上』(塙書

- 房、1976年、205～239頁）などの見解が挙げられる。
- 9 大室精一氏は「羈旅恋情歌の発想」（『万葉集相聞の世界 恋ひて死ぬとも』森淳司・林田正男編、雄山閣、1997年）において、このような歌を「羈旅恋情歌」と詠んでおり、その代表的な表現として「紐結ぶ」を挙げた。
- 10 「羈旅歌覚書―人麻呂歌集をめぐって―」（『日本古代論集・土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編』笠間書院、1980年）300頁
- 11 「万葉羈旅歌論」（『三田国文』（9）1998年6月）2頁
- 12 「悲別歌」の成立」（『万葉悲別歌の匠意』塙書房、2015年）300頁
- 13 「古今歌巻の論」（『万葉集の構造と成立 上』塙書房、1974年）211頁
- 14 「大伴田主、字を仲郎といふ。容姿佳艶、風流秀絶、見る人聞く者、嘆息せずといふことなし。時に、石川女郎といふひとあり。自り双栖の感をなし、恒に独守の難きことを悲しぶ。意に書を寄せむと欲へど、良信に逢はず。ここに方便を作して、賤しき嫗に似ず。おのれ埒子を提げて、寝側に至る。哽音躑足し、戸を叩きて諮ひて曰く、「東隣の貧女、火を取らむとして来る」といふ。ここに仲郎、暗き裏に冒隠の形を知らず、慮の外に拘接の計に堪へず。思ひのまにまに火を取り、跡に就きて帰り去らしむ。明けて後に、女郎、既に自媒の愧づべきことを恥ち、復心契の果らざることを恨む。因りて、この歌を作りて諛戯を贈る。」（『万葉集①』『新編日本古典文学全集』（小学館）97頁～98頁
- 15 松田武夫氏は「離別歌の構造」（『古今集の構造に関する研究』風間書房、1965年）において、「離別歌」冒頭の四首を
- 第一歌群（男性から女性へ、又、女性から男性へ贈った離別歌）に分類した。
- 16 三八七の歌を単独で見ると、女性が男性を送別する歌と理解できるが、三八八、三八九と関連させて見れば送別宴で詠まれた可能性が高い。
- 17 片桐洋一訳・注の『古今和歌集』（『全対訳 日本古典新書』三省堂、1980年）の注釈を参照した。
- 18 中塩清臣は「恋歌の基点―相聞と挽歌と羈旅歌と―」（『国学院雑誌』55（3）、1954年）において、「挽歌と相聞とのMediumが、羈旅歌である」と主張している。
- 19 『漢書』と『後漢書』において、「餞」の一字が送別する意味として用いる例があるが、「餞別」の用例が見当たらない。また、『旧唐書』における「餞別」の用例は五例ある。
- ① 「百僚遊宴過從餞別」（本紀第十四・憲宗）は一例ある。
- ② 「以レ詩餞別」（列伝第一百二十五・柳公綽）は一例ある。
- 「賦レ詩餞別」（列伝第一百二十七・劉鄴、列伝第一百四十二・田遊巖、列伝第一百四十六・吐蕃）は三例ある。「以レ詩餞別」と「賦レ詩餞別」の用例は、官僚同士の個人的な送別詩を詠む例があり、送別宴の場面で詩を詠む例もある。
- 20 「万葉集の餞宴の歌―家持送別の宴を中心に」（『国語と国文学』88（6）、2011年6月）
- 21 小林真由美「立夏のほととぎす―家持と暦―」（『成城国文学論集』27、2001年3月）を参照した。
- 22 「餞別」という主題を季節の景物に結び付ける表現について、松田聡氏は前掲論文において、『懷風藻』の餞宴詩、特に長屋王邸で新羅使を招待する宴会詩との関連性を指摘した。本論も松田氏の指摘に賛同する。例えば、『文華秀麗集』に収録された「餞別」詩の題名には、「秋日」「春日」「早春」と

いう語を用いており、送別宴が開催される季節を提示することも、『懐風藻』の記し方を継承するものだと考えられる。

- 2 3 『万葉集④』『新編日本古典文学全集』(小学館、1996年) 204頁頭注
- 2 4 松田武夫氏前掲著書365頁
- 2 5 「一つの読み―遣新羅使人たちの悲別贈答歌について―」(『日本語と日本文学』(2) 1982年11月)
- 2 6 「懐風藻と万葉集の交流」(『万葉集と比較詩学』おうふう、1997年)
- 2 7 『万葉集と比較詩学』(おうふう、1997年) 350頁
- 2 8 『文選(詩篇下)』(明治書院、新釈漢文大系(15)の「題解」を参照した。
- 2 9 拙稿『万葉集』巻三雑歌における「羈旅」(『日本学研究』(27)、北京日本学研究会センター編、北京・学苑出版社、2017年10月)を参照されたい。

引用文献

- (唐) 欧陽詢撰『芸文類聚』汪紹楹校注、上海・中華書局、1965年。
- 松田武夫『古今集の構造に関する研究』、風間書房、1965年。
- 伊藤博『万葉集の構造と成立 上』、塙書房、1974年。
- (後晋) 劉昫等撰『旧唐書』上海・中華書局、1975年。
- 露木悟義「羈旅発思と悲別歌」、伊藤博・稲岡耕二編『万葉集を学ぶ 第六集』、128頁～142頁、有斐閣、1978年。
- 紀貫之他撰『古今和歌集』片桐洋一校注、三省堂書店、1980年。
- 神野志隆光「羈旅歌覚書―人麻呂歌集をめぐる―」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』、285頁～302頁、

笠間書院、1980年。

安藤信広「羈旅する詩人たち―『万葉集』と六朝文学と」『日本文学誌要』第24巻、3頁～14頁、1981年。

伊藤博「一つの読み―遣新羅使人たちの悲別贈答歌について―」『日本語と日本文学』第2巻、1頁～10頁、1982年。

伊藤博『萬葉のいのち』塙書房、1983年。

西宮一民『万葉集全注 卷三』有斐閣、1984年。

(梁) 蕭統撰『文選』(唐) 李善注、上海古籍出版社、1986年。

神野志隆光『柿本人麻呂研究』塙書房、1992年。

小島憲之、木下正俊、東野明雄校注『万葉集①④』、小学館、1994年～1996年。

大室精一「羈旅恋情歌の発想」、森淳司・林田正男編『万葉集相聞の世界 恋ひて死ぬとも』、188頁～202頁、雄山閣、1997年。

辰巳正明『万葉集と比較詩学』、おうふう、1997年。

小林真由美「立夏のほととぎす―家持と暦―」『成城国文学論集』第27巻、1頁～23頁、2001年。

辰巳正明『万葉集に会いたい』、笠間書院、2001年。

梶裕史「万葉羈旅歌論」『三田国文』第9巻、1頁～15頁、1998年。

松田聡「万葉集の饞宴の歌―家持送別の宴を中心に―」『国語と国文学』第八八巻六号、19頁～34頁、2011年。

三田誠司『万葉集の羈旅と文芸』、塙書房、2012年。

平舘英子『万葉悲別歌の匠意』、塙書房、2015年。

劉菁菁『万葉集』巻三雑歌における「羈旅」、北京日本学研究会センター編『日本学研究 二十七』、149頁～160頁、北京・学苑出版社、2017年。

